W-1-3

タガログ語移動表現の経路表示[*1]

長屋 尚典
東京外国語大学
nagaya@tufs.ac.jp

1 はじめに

- 本論文では以下のことを論じる:
  - タガログ語の移動表現は**様態と経路が主要部 (=主動詞) の位置を巡って競合**する。
  - 通言語ビデオ実験の結果を分析することで、**タガログ語において (も) 経路の種類によって経路の表現方法が異なる**ことを示す。
  - この言語を単純に経路主要部表示型と経路主要部外表示型のどちらかに分類することは難しい。
- 本論文の構成は以下の通りである:
  - 第 2 節: タガログ語の言語類型論的特徴と移動表現の概要、先行研究をまとめる。
  - 第 3 節: 今回行った通言語的実験を導入し、タガログ語についての実験の概要を述べる。
  - 第 4 節 + 第 5 節: 実験結果を示したうえで、その結果について議論する。
  - 第 6 節: 本論文をまとめる。

2 タガログ語の言語類型論的特徴と移動表現の概要

2.1 タガログ語の言語類型論的特徴

- タガログ語はフィリピン共和国ルソン島中部マニラ首都圏およびその近郊地域で話され、オーストロネシア語族西マレー・ポリネシア語派に属する。
- 主要部先行型言語であり、典型的他動詞文においては VSO の語順をとる。
- 名詞句は格関係 (NOM, GEN, LOC)、名詞クラス (普通名詞 vs. 個人名)、数について標示される。[2]

(1) d⟨um⟩aan ang lalaki sa gazebo.
go.through⟨AV⟩ NOM man LOC gazebo
「男が東屋を通った。」

(2) d⟨in⟩aan-an ng lalaki ang gazebo.
go.through⟨RL⟩-LV GEN man NOM gazebo
「(同上)」

- 動詞はアスペクト、動作主性、および「焦点」について屈折する:
  - 「焦点体系」(ヴォイス体系): 形態的に、*-um-/mag-* (行為者ヴォイス (AV))、*-in* (被動者ヴォイス (PV))、*-an* (場所ヴォイス (LV))、*i-* (その他ヴォイス (CV)) の 4 つの範疇が区別される。
  - AV = 自動詞構文: NOM(S)-GEN(OBL) あるいは NOM(S)-LOC(OBL) という格標示 (例: (1))
  - PV, LV, CV = 他動詞構文: GEN(A)-NOM(O) という格標示 (例: (2))

[*1] 本稿に関する内容については以下の方から貴重な意見および情報をいただいた: 河内一博、高橋清子、松本曜、守田貴弘、山本恭裕 (敬称略)。言うまでもなく本稿に残るいかなる誤りも著者の責任である。なお、本発表は科学研究費補助金 #15H03206 (代表: 松本曜) からの支援を受けている。

[2] 本稿で用いる略号は以下の通り: AV-actor voice, CV-circumstantial voice, GEN-genitive, LK-linker, LOC-locative, LV-locative voice, NOM-nominative, PTCP-participle, PV-participant voice, Q-question, RDP-reduplication, RL-realis, SG-singular, ⟨ ⟩-infix, ”=”-cliticized.

- **pa-分詞 (*pa*-participle)** は接頭辞 pa-と動詞語根や名詞から形成される (長屋 2014):
  - 動詞語根が分詞形になるときヴォイスの対立を消失する。
  - 機能としては前置詞 (補語あり; 例 (3))・副詞 (補語なし; 例 (4)) に相当する。

(3) t⟨um⟩akbo pa-pasok ng cage yung aso.
run⟨AV⟩ PTCP-enter GEN cage NOM dog
「犬は走って檻に入った。」

(4) t⟨um⟩akbo pa-labas yung lalaki.
run⟨AV⟩ PTCP-go.out NOM man
「男は走って出た。」

2.2 競合型としてのタガログ語移動表現

- タガログ語は移動表現について典型的な**競合型**の言語である (cf. 松本 2017)。
- すなわち、**様態 (manner)** と**経路 (path)** が主要部の位置を巡って競合する。さらに、どちらの意味要素も主要部外要素となる。
  - 様態は主要部にも主要部外要素にもなるし、経路も主要部にも主要部外要素となる。
  - どちらがどの要素としてどの順番で表現されるかについて文法的に制限はない。
  - 本発表では (様態と) 経路の表示位置に好まれるパターンがあるかを通言語的実験によって探る。

(5) T⟨um⟩akbo =siya pa-pasok ng bahay. [様態 = 主動詞; 経路 = pa-分詞]
run⟨AV⟩ =3SG.NOM PTCP-enter GEN house
「彼 (女) は家に走って入った。」(作例)

(6) Pa-takbo =siya=ng p⟨um⟩asok ng bahay. [様態 = pa-分詞; 経路 = 主動詞]
PTCP-run =3SG.NOM=LK enter⟨AV⟩ GEN house
「(同上)」(作例)

- タガログ語の主要部と主要部外要素は以下のように分析できる:
  - **主要部 (head)**: 主節の述語のことであり、今回の実験に限っては主動詞と同じことである。
  - **主要部外 (head-external) 要素**: pa-分詞だけでなく、*galing*「から」などの前置詞、*loob*「中」、*tabi*「側」などの位置名詞もここに含まれる。
  - 本論では、節全体のアスペクトを決定する要素がその節の主要部と分析する。この言語では、前置詞句も pa-分詞もそれ自体で述語となることができるものの、その場合、前置詞句は状態アスペクトとなり、pa-分詞は将然アスペクト「まさに〜せんとす」を表現する (例: (7))。

(7) Pa-pasok =siya ng bahay.
PTCP-enter =3SG.NOM GEN house
「彼 (女) は家に入ろうとしている。」(作例)

2.3 タガログ語の移動表現についての先行研究

- Huang & Tanangkingsing (2005):
  - フロッグストーリーに基づく 6 つの西オーストロネシア諸語と英語・中国語の対照研究である。
  - タガログ語を **"pure verb-framing languages"** (337) の一つとして分析している。
  - タガログ語話者の産出したフロッグストーリー 6 本から様態動詞や経路動詞を含む 97 の節を抜き出し、その "motion components" を分析したところ、27.8% が様態を使ったのに対して、

72.2% が経路を含んでいた。
  - とりわけ、「フクロウが木から飛び出す」場面の描写においては 100% の話者が *lumabas*「出る」という経路動詞を使用していた。
  - pa-分詞については、様態も経路も表現できることを指摘したうえで、従属節という扱いをしている (327)。これが上記の motion components に含まれているかは論文からははっきりしない。
- Imbert (2012) + Foris & Vittrant (2016) :
  - Foris (2003) などの分析によりながら、タガログ語の「その他ヴォイス (circumstantial voice)」が「移動物ヴォイス (conveyance voice)」と呼ばれることもあるという用語上の慣習に触発されて、タガログ語はヴォイスによって経路が表現される**ヴォイス枠付け型 (voice-framing) 言語**であると分析した。(cf. 適用態)
  - Foris & Vittrant (2016) では同じ現象を扱い、付随要素枠付け型の特徴であるとしている。
  - この説の批判的検討には紙幅を要すること、また、その他ヴォイスの動詞が今回の実験では 1 回も出現しなかったことから、この説についてはここで言及するにとどめる。

3 ビデオ実験の概要とその実施

- 本研究では統一的な通言語的ビデオ実験「NINJAL-Kobe 移動表現プロジェクト・C 実験」を用いた:
  - 被験者は、15 の経路 FROM, TO, TOWARD, PAST, VIA (+BETWEEN/UNDER), ALONG, AROUND, INTO, OUT, ACROSS, THROUGH, OVER, UP, DOWN を含む 44 本の刺激映像を視聴し、
  - その場にいるように想像しながら、刺激映像の内容を言語化してもらった。
- タガログ語についての実験は以下のように行われた:
  - 実験キットは英語版を使用した:
    - フィリピンでは英語とタガログ語の二言語併用が日常的であり英語の理解に問題がない。
    - タガログ語の指示文によって逆に不自然にフォーマルな発話が産出される可能性がある。
  - 2016 年 1 月にフィリピン大学ディリマン校において 20 歳前後 (19 歳から 24 歳; 女性 9 名、男性 4 名) の大学生 13 名が実験に参加した。
  - フィリピン共和国は多言語国家でありタガログ語を母語としない人も多くいるが、今回の実験ではタガログ語地域で生まれ育った話者のみを対象に実験を行った。
  - タガログ語母語話者の協力で文字起こしし、発表者が実験共通のコーディングシートを用いてコーディングを行った。

4 結果: タガログ語の移動表現の実例とその分布

4.1 様態と経路の分布

- 図 1 M (様態)・P (経路)・D (直示) の言及率:
  - 主要部としてであれ主要部外要素としてであれ、言及される回数としては経路が多い。
  - 様態「歩く」 (M 0.55; P 0.96) と「走る」 (M 0.77; P 0.90)
  - 一方で、ダイクシス情報はどういう形であれ一切出てこない。
- 図 2 主動詞における M (様態)・P (経路)・D (直示) の指定率:

– 全体的な傾向として様態が主動詞になりやすい傾向がある
– 経路が主動詞となる確率が高いのは UP, DOWN, THROUGH, CROSS, PAST, AROUND などでありそれ以外の経路では様態が主動詞となる場合が多い。

- 図 3 経路の種類ごとの主動詞率
- 図 4 経路の種類ごとの前置詞 (的要素) 率

図 1　M (様態)・P (経路)・D (直示) の言及率

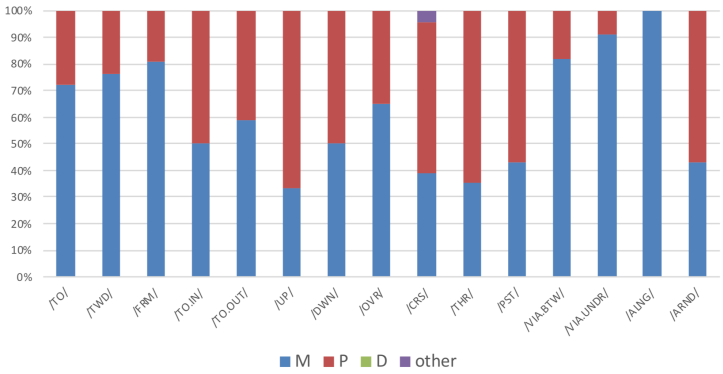

図 2　主動詞における M (様態)・P (経路)・D (直示) の指定率

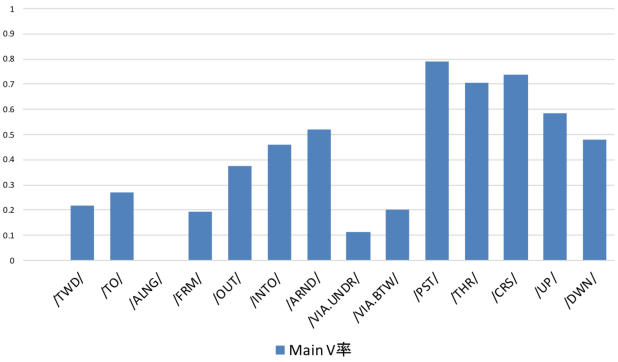

図 3　経路の種類ごとの主動詞率

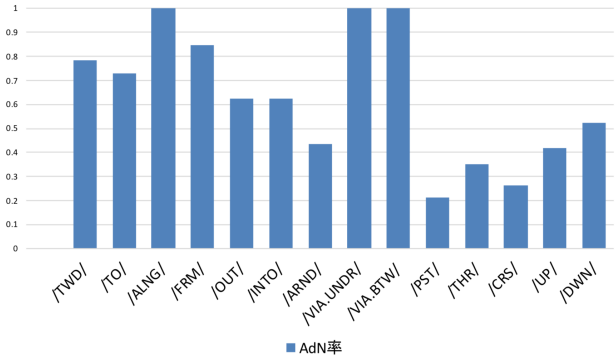

図 4　経路の種類ごとの前置詞 (的要素) 率

4.2　実例

(8)　nag-lakad　ang　lalaki pa-tungo sa　isa=ng　lamesa.
AV.RL-walk NOM man　PTCP-go　LOC one=LOC table
「男がテーブルに向かって歩いた。」

(9)　nag-la~lakad　ang　lalaki sa　gilid ng　isa=ng　ilog.
AV.RL-RDP~walk NOM man　LOC edge GEN one=LK river
「男がある川の端を歩いている。」

(10)　t⟨um⟩akbo yung lalaki sa　gitna　ng　dalawa=ng puno.
run⟨AV⟩　NOM man　LOC center GEN two=LK　tree
「男が 2 本の木の間を走った。」

(11)　nag-lakad　yung lalaki sa　ilalim ng　bridge.
AV.RL-walk NOM man　LOC under GEN bridge

「男が橋の下を歩いた。」

(12) nag-la~lakad ang babae pa-tawid ng kalsada.
AV.RL-RDP~walk NOM woman PTCP-go.across GEN street
「女は歩いて道を渡っている。」

(13) B⟨um⟩aba ng hagdan yung babae.
⟨AV⟩go.down GEN stairs NOM woman.
「女は階段を降りた。」

(14) nag-lakad ang babae pa-baba sa hagdan.
AV.RL-walk NOM woman PTCP-down LOC stairs
「女性が歩いて階段を降りた。」

(15) ⟨in⟩ikut-an nung lalaki yung puno.
⟨RL⟩go.around-LV GEN man NOM tree
「男が木を回った。」

(16) ni-lagpas-an nung babae yung mailbox.
RL-pass-LV GEN woman NOM mailbox.
「女が郵便ポストを通り過ぎた。」

5 議論: タガログ語における経路の表現位置

5.1 タガログ語の枠付け類型論における位置付け

- **際立ち (salience)**: タガログ語は言及率の点では (直示) 経路が際立っている言語だといえる:
  - 主要部であるか主要部外要素であるかを問わない場合、経路への言及率は高い。その意味での経路が際立っている言語であることは間違いがない。
  - ただし、日本語などのような主要部表示型言語に比べて、直示への言及が一切ないという点では大きく異なっている。
- **枠付け類型論 (framing typology)**: タガログ語の枠付け類型論における位置付けは、つまり経路が主要部で表現されるか主要部外要素で表現されるかは、経路の種類によって異なる:
  - 図 3・図 4 からわかるように主動詞・前置詞 (的要素) になりやすさは経路ごとに異なる。
  - この言語を単純に「経路主要部表示型言語」(Talmy のいう「動詞枠付け言語」) あるいは「主要部外表示型言語」(「付随要素枠付け言語」) と分類することは難しい。
- Huang & Tanangkingsing (2005) のフロッグストーリーの分析結果とは異なる結果となった:
  - 言語類型論的に異なる言語で統一的言語実験を行うことの意義が確認された。
  - さまざまな経路の種類の移動表現を比較する今回の実験の有効性も確認できた。

5.2 「経路マップスケール」との関連

- 本ワークショップで提案されている経路の種類と表現位置に関するスケールについて、タガログ語の経路表現を考えると、図 5 のようになる:
  - 図 5 は、その経路に関して Vector か Conformation あるいは両方をコードした回答を分母とし、その経路に関して主節の主動詞、等位節の主動詞で Vector か Vector+Conformation が表現されている比率を出したもの。赤は 66% 以上、オレンジは 33% 以上、色なしは 33% 未満を表現している。
  - スケールの左では主要部外要素で表現されることが多い。特に、TO/TOWARD などは pa-分詞によって表現される確率がかなり高いといえる。
  - 一方で、スケールの右では主要部すなわち主動詞で表現されることが多い。

– ただし、例外と考えられるものもある: UP、DOWN など。

- 経路 OUT が他の経路に比べて特に主動詞で表現されやすいというわけでもない:
  - Huang & Tanangkingsing (2005) では、タガログ語は「フクロウが木から飛び出す」イベントにおいて 100% の話者が経路動詞 *lumabas*「出る」を利用していたと報告している。
  - しかし、今回の実験では OUT は、主要部であることもあれば主要部外要素であることもあった。
  - Huang & Tanangkingsing (2005) の結論は、タガログ語移動表現の経路動詞について適切な一般化とはいえず、「フクロウが木から飛び出す」イベントについての一般化であるに過ぎない。
  - 実際、様態を主要部とした「飛び出す」イベントの実例がインターネット上では見つかる:

(17) Gusto mo ba=ng l⟨um⟩ipad pa-labas ng bansa?
want 2SG.GEN Q=LK fly⟨AV⟩ PTCP-go.out GEN country
「あなたは (フィリピン共和) 国を飛び出したい?」[3]

6 おわりに

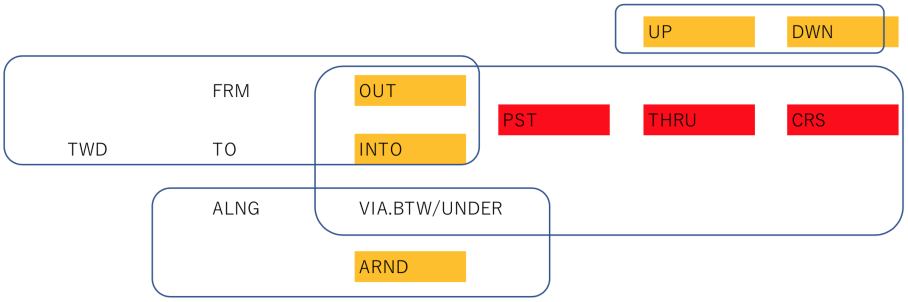

図 5 「経路マップスケール」とタガログ語の経路表示

- タガログ語の移動表現は様態と経路が主要部 (=主動詞) の位置を巡って競合する。ある経路が主要部として表示されるかどうかは経路の種類によって異なっており、その傾向は本ワークショップで提案するスケールとおおむね一致している。
- ヴォイスシステムと移動の関係についてはさらなる分析が必要である:
  - 同じ動詞語根でも AV は atelic な、PV/LV/CV は telic な解釈を持つと提案されている。
  - 移動表現、特に境界越え (boundary-crossing) に関係するかもしれないが、分析中である。
  - Imbert (2012) や Foris & Vittrant (2016) の分析については別に議論することとしたい。

参考文献

Imbert, Caroline. 2012. Path: Ways typology has walked through it. *Linguistics and Language Compass* 6(4). 236-258.

Fortis, Jean-Michel & Alice Vittrant. 2016. Path-expressing constructions: Toward a typology. *STUF - Language Typology and Universals* 69(3). 341-374.

Fortis, Jean-Michel. 2003. Voix et relations spatiales en tagalog. *Bulletin de La Société de Linguistique de Paris* XCVIII(1). 455-484.

Huang, Shuanfan & Michael Tanangkingsing. 2005. Reference to motion events in six western Austronesian languages: Toward a semantic typology. *Oceanic Linguistics* 44(2). 307-340.

松本曜 (編). 2017.『移動表現の類型論』. 東京: くろしお出版.

長屋尚典. 2014. タガログ語の pa-形. 第 148 回日本言語学会, 法政大学, 2014 年 6 月 7-8 日.

[3] https://www.facebook.com/BiyaheNiDrew/videos/touchdown-taiwan!/1706965996017466/